

山岳文学序説

島本 恵也



島本 恵也

みすず書房

島本 恵也
山岳文学序説

1986年5月2日 印刷
1986年5月12日 発行

発行者 北野民夫
発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15
電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京0-195132

本文印刷所 三陽社
扉・表紙・カバー印刷所 栗田印刷
製本所 鈴木製本所

© 1986 by Misuzu Shobo
Printed in Japan
ISBN 4-622-01085-2
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

第一章	目的と方法	資料	3
第二章	山の呼び声		39
第三章	絶頂の超越		75
第四章	溪谷のいざない		111
第五章	浪漫的山岳の黄昏		139
第六章	対象性の文学		147
第七章	山岳文学の時間様式		180

後書に代えて（河井醉茗）
本書のあとに（島本 融）

見返しと挿込写真

見返し（表）雑誌『文庫』（明治三十六年一月号）と内容の一部。

小島烏水著『山水無尽蔵』表紙と島崎藤村の序文、奥付。

見返し（裏）小島烏水著『雲表』（明治四十年）表紙、挿込写真と第一頁のシェイクスピアの句。烏水より河井醉茗あての手紙。

一、ウォルター・ウェストンとその手紙（小島烏水あて）。

二、志賀重昂

三、志賀重昂著『日本風景論』（明治二十七年）初版表紙。

四、小島烏水の顔（茨木猪之吉写）。ペイカー登山姿の小島烏水。

五、小島烏水と千葉亀雄の色紙。

六、槍ヶ岳の小屋の前の上条嘉門治。

七、『山岳』第一号（明治三十九年）の表紙。

八、『山岳』第一号の山岳会設立主旨書。

第一章 目的と方法 資料

かつて私は一冊の洋書を手にして、それから忘れ難い感銘を受けた。それはありふれたシェイクスピアの作品集にすぎなかったが、その表紙を開いたとき、見返しに数行ならぶ手蹟があつて、旧所持者の一英国人のものと思われた。「自分の数回に及ぶエヴェレスト登山に、この書物はつねに伴侶であつた。中にも忘れ難いのは、カンチエンジュンガ峯の二万フィートの暴風雨の中でこの書物を唯一つのなぐさめとして過ごした日々のことである」という意味のことが記されてあつた。私は心に深い衝撃をうけた。日本文学を専攻する一人としての私は、当然、わが日本の文学には、かかる峻峯の大暴風雨の中に読むにふさわしいような性質のものは一つもないと考えたが、そのようなことよりも私の心を深くひきつけたのは、雲

のはてにちらと白い頭をのぞかせる容易に人間を寄せつけぬ崇厳な山容と、その山頂をめぐって、おそらくは地上のいかなる嵐をも絶して長く烈しく叫ぶであろう暗黒の烈風のうなりや、その中にくりひろげられる「リヤ王」や「オセロ」の劇しい深刻な人間の心のたたかいなどの想念であった。この世界には、多くの人の行為と表現とがみちみちているが、しかしその中に、きらめく星の如き支配的な一点がある。わずか数行のこのはしり書きは、私にとってまさにかかる支配的な意味をもっていた。そこには地球の地質時代がとりまいている。オセロの悲しみもリヤ王の怒りもマクベスの宿命も、それぞれ宇宙的なものに成長し、暴風雨と共に荒れ狂っているのではないか。これは一つの超越、人間的なものから人間的ならざるものへの超越である。カンチェンジュンガは幾多の前山をめぐらして天の一角に卓然と聳えていて、およそ地上に根を下しているもののようには思えない。地上から遠く遙かなる存在である。しかもこの超越はある人びとにとってはこのうえもない魅力なのである。私は思いに沈みながら、本文のいたるところに引かれたアンダーラインから、かの超越的な風のうなりを少しでも聞き出そうとするかのように心ひかれて眺めいった。この気分、かかる超越をとりあげ、日本文学の中からたとえ少しでもそれらしいものの痕跡を探り出そうという気持が私を山岳文学研究へと向かせたのである。

超越という言葉を定義するのは困難なことである。少なくとも超越には西欧的超越と東洋的超越とがある。西欧的超越は形而上学的なもので、何か超越した実体が考えられる。しかし東洋人は一面から考えれば超越しようとする人間の行為に重きを置くと共に、素朴に自分をとりまく対象的存在の中に自己を置いて、自分も一つの点景的存在となり終る。そこには別に実体は考えられない。最初実体を仮設して次第にそれを打破してゆく仏教の考え方はそれをよくあらわしている。西欧的なものと東洋の伝統の交錯のうちに東洋の近代の超越が山岳に向かって行われ、しかも山岳において何ものも完成されなかった。人びとは漠然たる情熱のうちに人間の社会を捨てて、その正反対のものである山岳に向かった。かつて俗塵を避けるとか隠遁とかいう言葉で表現された気分がやはり残っている。しかし山岳に一つの超越的理念を投影した傾向もはっきり現われている。しかもさらに重大なことは、山頂にいたったとき、超越はやはり彼方にある。人間はただ自己の世界の限界にまで来たにすぎないことを岳人がさとしたことである。しかもかかる苦しみに満ちた理念とのたたかいのかたわらに、あたかも東洋の山水画中の点景人物にもひとしい、対象の中へそのままに融合してしまつたようになまつた東洋的な超越も決して忘れられたものではなかった。ここに、山岳というたつた一つの対象を中心として、近代の東洋の錯雑があらわれている。この東洋的気分につ

いて少し考えてみよう。

カントは、かの豊富にして興味深い实例に充ちている『判断力批判』において、自然の崇高性について、人間の心理分析を行い、この感情はむしろ嚴肅な趣をもち、美の如き直接的快感を与えるものでない故に、甘美なる刺激と調和しがたいと述べる。さらに岳人にとって共鳴されるであろう次の言葉がある。「心意は対象から單純に惹きつけられるのみでなく、むしろ絶えず交互的にそこから反撥されるのであるから、崇高についての満足は、積極的快感よりもむしろ感嘆、もしくは、畏敬を含有するものである。」ひきつけられつつも重荷を負うた如くに苦痛の中に登山する人びと、特に初期の開拓者にとって、このカントの考えは肯定されるであらう。カントはさらに、自然そのものが崇高なのでなく、「正しく崇高と呼べるべき感情の状態に置かれるためには、吾われの心意の中にはこれに先だつて已に種々の理念が充満していなければならない。」と述べて、山岳を登ることに、單なるスポーツ的登山以上の意味を見るわれわれを支持してくれる。かかる崇高についての判断は、第一に文化を必要とし、第二に社会において人びと相互の協約に基づいて成立するのではなく、第三にむしろ人間の本性の中にある実践理念に対する感情、すなわち道德的感情の中によこたわることが記され、崇高についての他人の判断をわれわれが要請することは、人間における道德

的感情の前提のもとにおいてのみ可能であると結論する。これは崇高の判断にアプリアリの原理があることを知らしめることとなる。しかしカントの意見に裏づけられて来た山岳に対する超越的気分というわれわれの考え方も、東洋人として、最後の道徳的要請の前で立ちどまらなくてはならない。

日本アルプスの開拓者のよき案内人であつて、外人にまでミスター・カモンジの名の下に親しまれた嘉門治なる一老獵師がある。彼は北アルプスの入口、信州島々村の出生である。十八歳のとき山間に分け入りそめてより七十有余にて歿するまで、当時人跡未踏といつてもよい上高地を中心とする山岳地帯に活躍した。上高地の梓川のほとりに彼は孤独の小屋をむすんだ。老年になつてからは岩魚を釣つてよすぎとなし、頼まれて気がむけば山案内人ともなつた。彼が案内をした岳人は有名な人びとが多かつたが、彼はそれを子供のようにあつかい、誰もそれに腹を立てるものはなかつた。青壮年期には山を狩りまわつて多くの熊をうちとり、老年に及んでからは岩魚を生きたまま吞み下した。ある日彼に岩魚を請うものがあつたが、秤がないから、多すぎでは彼の損になるし、少なすぎでは買手の損になるからとこゝとわつた事実が逸話として伝えられている。病にかかるや一切の食を断ち、悠然とその生涯を終えた。ある岳人が彼に山の信仰について問うたが、彼は信仰の仕方を知らぬと答えた。

しかし時として山頂の小祠にぬかずいて狩の御礼を言上する姿を見かけた者もあるという。おそらく初期の北アルプス登山者にとって嘉門治ほど親しまれた人物はあるまい。岳人はことごとく彼の孤独な生活に同感を持っていた。この一老獵師のことを記した文献を、手近にすでに数篇挙げることができるほどである。

黒部溪谷を開拓したので有名な冠松次郎氏は次のような話を記している。ある年のこと、彼が双六谷をさかのぼって黒部乗越を経て黒部の上流へ出たことがあった。その小屋に老若二人の岩魚釣りを彼は見出した。この二人は信州の人で、十二、三年この方、夏になると上高地を経て槍ヶ岳をのりこえ、黒部乗越から黒部の上流に出で、そこで一夏を岩魚釣りにくらすことを楽しみにしていたということである。冠氏はこの人びとの境涯に同感の意を表明している。このように高い山々の間をかくも奥深く分け入る岩魚釣りに出会ったことに浪漫的興味を覚えたようである。

嘉門治といい、黒部上流の岩魚釣りといい、またそれに共感をいだく岳人たちといい、いずれも実践的理念とか道徳的感情とかには縁遠い存在である。東洋風に超越した人びとで、山水画中の点景人物である。カントが考えたような先験的なもので構成された宇宙ではなく、また道徳的感情の投影としての山岳ではない。嘉門治や岩魚釣りや、それをとりまく岳人た

ちの形成する相互に理解し合つた一つの世界は、たしかに山岳の精神的景観であるには相違ない。しかしそこには自然それ自体の影がしのびより、人びとを山の霧のようにひたしている。これら点景人物は人間的存在性を許しうるかぎり稀薄にされている。そのかわりに自然それ自身、山岳自身がせまってくる。ここにおいて人間から自然への超越が行われる。ラスキンの山岳美論といい、エマーソンの自然論といい、いずれも人間をもって自然の主人たらしめ、山岳がいかに人格に影響を与えるかを論ずる限りにおいて、これまたわれわれに縁の遠いものである。東洋人は山岳そのものの中へ超越し、山岳は山岳そのものとして意味があつた。中国の山水画をひろげて見ると、山岳や溪谷のかげに愛らしくもささやかな人物の点在するのを見る。彼がいかにしてそこに立っているのか誰にも分らないが、さりとして偶然の登場人物でもないように思われる。彼らは樹木と同じほど、山水にとつて、なくてはならぬ存在である。山の気が彼らの呼吸に通っている。このような超越境をヨーロッパ人は理解できぬであろう。日本のアルピニストは近代人であつたが、ラスキン流に山岳と人格の問題を真剣に考えたりせず、ただ惹かれて山のふところに飛びこんで行つたところに、人間から自然へ直ちに超越しえたわれらが祖先の子たることを示している。山岳における超越の性格を知るうえに、このような考え方の型のちがいはつきりさせることは、哲学的に厳密なもの

でなくとも、そのより広き基底を明示する必要なことである。

このような超越的気分をもっともよく表現するものは日本アルプス初期開拓時代の登山記録文学である。私はこの文献を対象として研究をすすめてゆきたい。想えば、かかる気分は現代の人びとにとって古典にも等しい遙かなる存在でもあろう。現代人は絶望しているといわれる。たしかに彼らは自覚的にまた無自覚的にさまざまに絶望している。彼らは建設よりもむしろ破壊を好むようである。そしてそれに一つの運命的意味をつけているようである。

しかし「絶望して自己自身であらうとする」にせよ、「絶望して自己自身でないことを望む」にせよ、現代人は人間たることをやめない。たとえ自ら命をたっても、それは人間の中において自己を失うのであって、人間でない別の世界へ出でんとするものではない。このような自己の内へ求心的に惹かれつつ絶望しゆく現代に立って、人間とまったく別の大自然へ、人跡未踏の地へと志した一群の近代人をとり上げようと思う。たとえその山岳が地球上にあっては低いものであり、ヨーロッパ・アルプスの三分の二の高度しかなく、人跡未踏といっても、すでに数人の足跡が印せられていたにせよ、その象徴的意義はまさにかくの如くに偉大に超越的であった。私はこの時期を明治三十五、六年以後、明治四十年代までに限りたい。明治三十六年は、わが国近代的登山の先駆者であり、登山記録文学においては実に代表的地

位を占める小島烏水氏が、その前年、はじめて北アルプスの一角槍ヶ岳の頂上をきわめて、これを記録して世に問うた年である。その後、日本の中央山岳地帯はわが国の岳人によって近代の意味の登山によって開拓され、その下限は大体明治四十年代に求められる。それ以後に開かれたものは多いが、すでに本格的な技術的登山の時代に入り、私の目指す超越的気分はうすれてゆく。それは山岳地帯のひらけたことにもよるが、むしろ人びとの背景をなす思想傾向の変化が重大である。すなわち浪漫的時代にあつて岳人の特殊な気分は形成され、その傾向の失せると共に登山の気分も変つてきた。浪漫的思想傾向の一翼としての岳人の山への思慕は多くの言を費さずして明らかなように思われる。しかしそこにすでに変遷がある。

登山の超越性は社会性よりの超越であつて、その点で旧い東洋的超越と同じであるが、思想自体としてはそうであつても、発生的にみれば、一定の社会的な傾向の一現象にすぎないことを忘れてはならない。日本の近代浪漫派的傾向の一表現としての岳人の思想の文学的表現、これが私の研究対象である。浪漫的傾向が社会的にいかなる意味を有するかは、この論文では立ち入らぬこととして、とにかくそれは広い分野を持つ。初期の岳人をして山岳に向かわしめた浪漫的要素も多彩なもので、それには次のようなものがある。

第一に北村透谷、島崎藤村等を中心とした『文学界』の一派があつて、ヨーロッパの香高

いロマンティズムをそのまま日本にもちこんだ。これは一つの気分であつて、それ以上でも以下でもない。彼らを除いて近代日本のロマンティズムを語ることはできない。その中でも透谷にはかの有名な「富嶽の詩神を思ふ」の一文がある。短いものであるが、いたずらに一つの気分が紙上に躍るのみで更に要領を得ない浪漫派特有の文体で書かれ、同感されても了解出来ないという性質のものであるが、要するに富嶽をもつて朽ちず、死せざるものと讃え、東洋日本の文学精神の象徴と見なすのであるらしい。「白雲、黒雲、積雪、潰雪、閃電、猛雷、是等のものを用役し、是等のものを使僕し、是等のものを制御して、而して恒久不変に威霊を保つもの、富嶽よ、夫れ汝か。渡る日の影も隠ろい、照る月の光も見えず、昼は昼の威を示し、夜は夜の威を示す。富嶽よ汝こそ不朽不死に邇きものか。汝が山上の浮雲よりも早く消え、汝が山腹の電影よりも速に滅する浮世の英雄何の戯れぞ。」「アルプスの崇巖或は之を欠かん、然れども富嶽の優美何ぞ大に譲るところあらん。われはこの觀念を以て我文学を愛す。富嶽を以て女性の山とせば、我文学も恐らく女性文学なるべし。」「尽きず朽ちざる詩神、風に乗り雲に御して東西を瓢遊し玉へり。富嶽駿河の国に崛起せしといふ朝、彼は幾億万里の天崖よりその山嶺に急げり。而して富嶽の威容を愛するが故に、その殿居に駐まり棲みて遂に復た去らず。是より風流の道大に開け、人麿赤人より降つて、西行芭蕉の

徒、この詩神と逍遙するが為に、富嶽の周辺を往返して、形なく像なき記念碑を空中に構設しはじめたり。」この単純な思想の文章も、山岳に象徴的意味を与えたこと、その象徴は永遠なるものの象徴であること、富嶽を日本的に優美なりと説きながらも一方では、「威容」と表現して、文全体にみなぎる気分はむしろ日本的な優雅よりも漢文学風の超越が表現されていることを注意すべきである。透谷のかかる思想傾向は彼のエマーソン観によるところが多い。すくなくともエマーソンが「自然」に「心」に対応する位置を与え、この二者をもつて宇宙を構成するものと考えたことは、透谷が指摘するところであって、しかも、エマーソンが「自然は人の為の用にして人は自然の主人」と考えた傾向は、東洋人たる透谷のうけつぐところとならず、彼は自然にはるかに超越的にしてしかも象徴的な地位を与えたいことがうかがわれるが、今はこの問題に深入りしないことにする。しかもこの透谷の一文には、日本風なみやびやかさよりもむしろ東洋風の超越が語られ、山岳が永遠なるものの象徴と考えられた点を指摘すれば足る。自然に対するこの幾分迫った拮据たる態度は、彼の同志島崎藤村においては、さらに悠々たる趣をもって展開され、より明るく西欧風なロマンティズムを表現しているように思われる。彼には東信の高原の雲の研究がある。これは自然を科学的に解剖することに対する浪漫的な発見のよろこびであって、またそれがラスキンの亜流で

独創の価値は高くないにせよ、文化的活動の中心を遠くはなれ、高原の隠遁的智識人の間に、一種透明な閑寂さの中に人生の一時機を沈潜した藤村の、まことに愛すべき一つの作業として、その気分を理解することが出来る。彼は山岳そのものよりも山岳の人生を説き、また人生の山岳をも説いたようであるが、また一面には自然を自然としてこれに對したこともあった。小島烏水の登山記録集『山水無尽蔵』（明治三十九年七月）にすでに高原を下っていた藤村は著者の請うにまかせて序文をよせた。当時の彼は既に市井の人である。その後遂に高原も山岳も彼の生活には入ってこなかった。そして藤村独特のうすら寒い人生の影の中にふみ入っていたのであるが、しかしこの序文には依然として浪漫的山岳の姿が崇高な空間に聳えているのを見る。彼の貧しげな市井の生活と對照して見るとき、われわれは不思議なものを感じるほどである。

祖先は夢み、子孫は行ふとかや。暗き中世の昔より幾多のすぐれたる先達ありて、山嶽に通ずる道路を開拓し、自然の堂屋に參することを教へたりき。かゝる祖先は皆な豪邁なる創設者なり、觀察者なり。指導者なり。惜しいかな。形式いたづらに存して精神埋没す。明治の今日、石に刻まるゝ靈神の名を見ること多しといへども、人を導くに足るべき先達あること鮮し。多くの行者は自然の説明者にあらずして、山嶽の案内者たり。こゝに於て別に山嶽に通ずる思想の道路と、新しき先達